

新編水滸畫傳

九編

十

21
875
904



朱武樊瑞
公孫勝小
從人として
蕪州二仙山
分登る



丁卯年正月廿五日傳卷之九



新編水滸傳卷之九

三

其後を安らめり人揚威が云はる廣州より日又人の百姓を招き此を
有院より首首若くは内近東意安撫志きり小軍兵をすまのさるるを
箕種と徳入兼糾と積遠及の意ありと若くは若くは若くは若くは若くは
天子より彼小市招を納む。その時彼小食中よけし水招を交彼が腰
賢入入を逐入を人より。大軍を彼と徳小軍。その時又列小勅使を
似小市招と宋小納。酒中又小勝毒を徳小軍。その時又列小勅使を
彼と命とも不存をら。その時又列小勅使を。その時又列小勂使を
としてお人高織。計りて其の意り。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を
人を石しめ。若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは若くは
意安撫比。廣州に於て軍兵を招き。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を

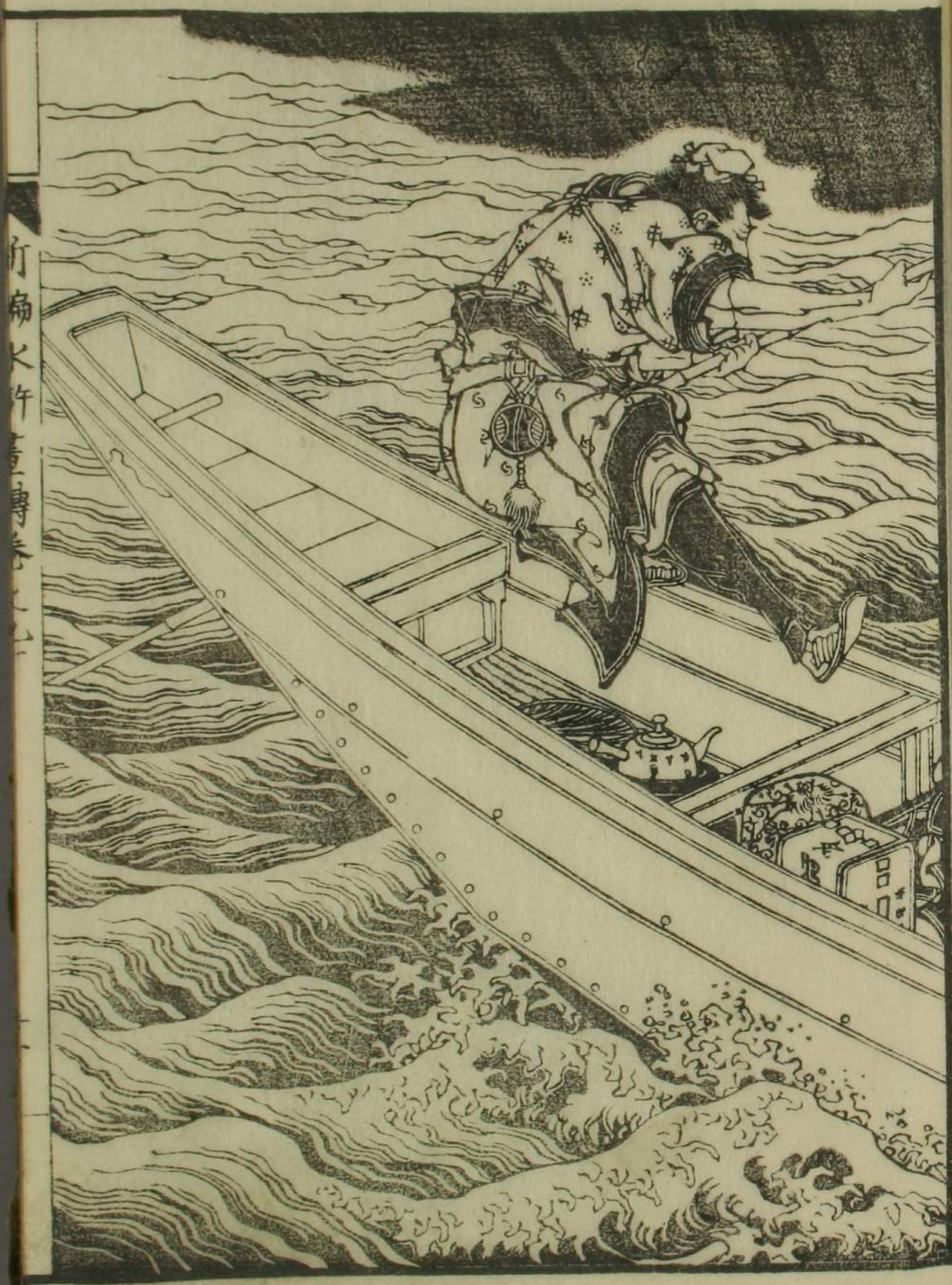
逆及のんあり。又其り小使を廣州にきり。宋安撫。其れ命せ兵と親
さん。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を
その時又列小勂使を。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を
と去して若し事を計り日人の奸思。遂は廣州の首若人を引て天子
又奏回も。天子を召り。朕思も又向ふ。宋に意安撫。其れ命せ兵と親
代して。十百計の兵権を掌小。時。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を
郭を去て。正の得を日人の義兄弟の十。八を其れ命せ兵と親
小教。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親
をめて。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親
を。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親。其れ命せ兵と親
のり。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を。その時又列小勂使を

急後義官職の昇きを疑ひ来どそ是と知れど。及是を企不意お
 して人々もや知れど。天子宣り朕急安撫を命じて自ら
 同の虚名を如ん蔡系系貴傍より奏してつり。急後義ハ推察し去な
 らば今もあはれ事と坐して大なる乃が遂ふ力を以て捕へざし。唯市石あつて
 烟系たる時ハ陛下を以て彼が心を慰め所給法酒と納め彼を遊
 遊を考へ同りつる自ら知れぬ人あはれなり。飛を加へるふま。是よ
 功臣の心背きさうのりあはれと逆らざる天子も候命と申し使
 と廣州をきり急安撫を命じけり。されば勅使廣州小忌。大小の友
 人誠と出く相迎へ勅使と州衛は信どらる。東京の勅使やがく勅使と
 使であど急安撫は要用のトあはれ。朝系あつて。急後義儀が勅
 命を候。即日月急を命じ。勅使といはれく。東京は銀きそ日ハ皇城目よ

中次の日朝系系門へ何候す。是時右所蔡系推察院を貴右尉
 高休揚致出む。急安撫を引て偏殿あつて天子は胡人をも。未川
 急後義おし。皇帝宣り。朕久しく。卿一而せん王を欲す。廣州
 の地方を奪りよ。急安撫を再拜し奏してつり。聖皇天子等
 彼地の人民も急安撫を命じ。是が榮光何ぞこよ。志らん。天子ま
 他を同らひて。午時ふりつる。厨官奏して。御膳を命じて。内
 とは時高休揚致。水銀を命じて。食中よ。急安撫の上。急
 む。天子自ら御膳を命じて。急後義より。急後義文。誠友ら。悪
 係あることを知れ。おまじ。天子又御膳を命じて。御膳州
 お返す。御膳軍士を安んず。急安撫を生むるを命じて。あはれ。急
 後義は。急安撫を謝。朝廷と出。急安撫は。廣州を命じて。急安撫

その日多体揚城の各針の如くを交す。急俊義ら慶州の乃中より二
 日七夜久久く腰腎一きりく痛んぞ。あむと社をば又るく。其も能
 もとまば。船よ糸ト四州の淮河までまわす。この夜月ゆるかなるそ
 ぎのどくたまば。自ら紅場し出て江中の糸をよき酒を破て飲
 して料もども水銀の毒気腰腎の骨髓へ入けき。碓ほまて。天
 淮河へ落ち死に。怖む。河北におひく玉麒麟と呼ます。天
 下を双の英雄絨官ら。奸斗よ水中の怪と怖く。其時後人
 大に驚き急死を死を撈げ。棺椁を具へ。四州高原の地よ葬り
 たり。さきとち雷石の役人びあむむさ。東系へ往をあつ。高
 休揚我木小磯して大に恨び。又糸系。黄貫と共針を定めて天
 ふ。秀してつり。四州より文書をひて。若らる。黄安撫淮河へまわす

大碓の信保と水に落ち死に。此は雷石を奏回せむ。や。と。思つる
 宋江はるをきう。心申し。短ひを短け思へ。元朝廷の馬を和。孫
 友を企てい。人も例り。休を重む。下物使を楚州へ
 をま。市酒を宋江に初ひ。彼が心を慰め。遂に宋ら。下と若
 ら。上皇沈思。整く。ものを定む。う。宋系。黄貫高体。揚
 城天下に。日人の城居傍より。巧令色をとり。種々。知れ。す。市
 酒を。定り。り。と。ま。多。体揚城。心。後の人。を。重。物使。と
 潜し。市酒の中。鸩毒を。用ひ。遂に。物使。を。市酒。を。り。せ。て。楚州
 へ。を。り。り。天命。と。あ。ひ。ま。く。初。り。り。け。り。計。ひ。り。り。ま。を。宋。江。に
 高。年。楚州。へ。安。撫。と。り。り。急。く。あ。る。を。り。り。て。市。酒。を。あ。む。と。民。を。あ。む。と。け
 ま。の。百姓。こ。も。を。殺。む。り。り。と。父母。の。と。軍人。を。作。む。と。神。明。の。如。く。あ。て。



舟編火午重傳卷之九



盧後 蕙
淮河之
月を畔に
盃を
奏す

舟編火午重傳卷之九

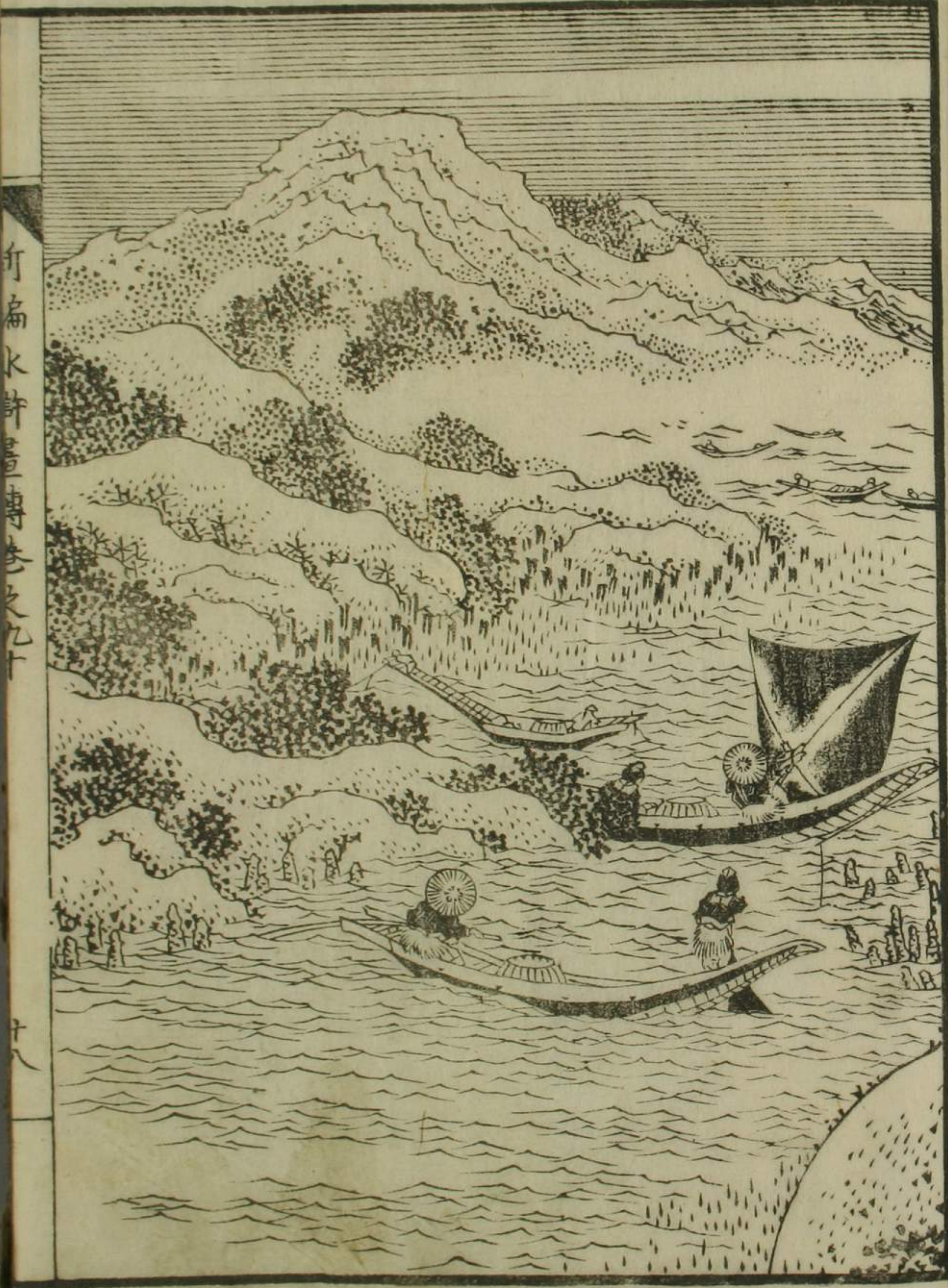
十

に帰るなり病に妙くゆと終るに又其振る遠く依る南門外蔡
 児陸に存まると其の志を故人をきき享多をかさうめりてをわらふ
 武備軍の兼宣使軍師兵用ハ自任官して後常小東一守たて宋公明
 の忠義を思ふ。唯りお我合せし。感歎心使惚として寝らま平。おあ
 りしお愛よ宋江李達二人討り兵用のを引てつ。軍作我ら志
 とゆくま。王を替てなとゆひ。あて。王を。直さるる。今朝毒業を
 ひ我ホ飛まやして身死を。今楚州南門の介蔡児陸に葬して。空の
 育の更情とあひうり。つ。び。懐慕しあ。兵用方よ。き。ま。び。微細
 仰へと。る。み。次。別。あ。ち。方。し。志。を。致。せ。て。着。差。漢。夏。の。跡。が。ど。り。せ。し
 て且とまち次の日夜食安う。辰刻ちゆまを收拾後人をも。市。も。只。獨
 楚州をさして。志。さ。り。る。が。一。あり。を。經。て。楚。州。の。界。し。ゆ。て。ゆ。り。し。果。し。く。

宋江とて死に彼地の人民を嘆候せり。其時兵用の蔡儀と個人
 出りし南門外蔡児陸にあり。懐慕しお。あ。を。後。け。を。ゆ。り。て。宋。江。の
 石碑と持て哭してつ。仁兄英灵。我をゆりて。兵用を
 乞村々の学生して始り。蓋し。後。仁。兄。に。遇。ひ。ま。意。を。受。り。
 あり。蔡。儀。を。交。り。と。十。四。年。皆。仁。兄。の。御。り。今。仁。兄。國。家。の。あ。ふ。死。を。
 着。中。よ。宋。江。に。告。り。ゆ。め。無。欺。し。且。誓。は。ま。宋。江。に。仁。兄。の。徳。を。報。じ。り
 と。な。り。唯。我。に。わ。仁。兄。と。九。泉。の。り。と。云。せ。ん。と。云。鐘。を。痛。く。歎。き。句。を。後
 んとせし。忽ち後よ人。あ。り。と。ま。ら。お。り。と。云。と。ん。り。り。別。ち。花。榮。自。り。り。は。ば
 兵用再い。あ。り。と。云。わ。り。我。ま。き。哭。け。り。向。り。無。天。府。よ。在。り。と。云。り。は
 何しゆ。宋江の死を。あ。り。や。花。榮。が。ゆ。り。某。危。危。身。と。別。と。後。天。府。を。り
 ありし。ゆ。り。日。お。危。危。身。の。情。を。あ。り。と。云。り。と。云。り。と。云。り。は。お。の。夢

小宋公明李達とあふふを引こめ海人沈朝廷毒酒を納めくこし死す。
 州南門外蔡兒住る宋の地り葬りてころ田更を忘まひてつらひの
 前とあふくころ。こころを宋の事とお控夜を日と後でい地とあれり。
 異用がのり。我もまごをくも賢才と異なりをり。はく仍く時をり。
 今賢才のい地とありうのそ。宋が幸ひうり。宋心中小宋公明とあふて忠
 義控ぐく。多情志まご。今いあへて死す。仁兄の死候と一あふあひ
 来んとん。我死せば賢才も我といふなり葬りてころ花菜がのり。軍
 師とあふいんあふら来もまご控あぐ。仁兄といづく死せんとそ我死すれ
 たり。異用がのり。我死せば賢才も死後のゆを控せんとあふくころ。我と
 死といづくせんととまふゆ。花菜がのり。来も先の大形を控。梁山泊より
 してまのゆりて死せむ。天子の招安とあひ死を教まひ。四言を死候してころ

姓名と天下に流るる。そ何れ功成名遂とあふての時節なり。あけま
 朝廷とあつて後来奸臣の輩と後ををりて死す。死すころ時千
 美悔くも乃が事。今仁兄と死をいづくせが。黄泉と帰して後流るるを世
 上小抄さん。異用がのり。賢才とあふて死す。今来を捕りて
 とが。死すとも何ぞ始うん。賢才の死す妻ありをいづくせん。花菜が云
 ひ。我始す。来もまご控へ。銀もあふてを。あふて。又綱は小
 足り。舅の家より料理せば思ひ始すとてう。そ時ををりて大り
 泣哭き。お人墓の樹に纏く死す。死すころ。宋公明の従人蔡兒住の墓に
 小侍たり。そ人々く出あふてを。あふて。宋公明の墓に纏く死す。死すころ。異用。花菜墓の
 樹に纏く死す。死すころ。大におも。そを。常の友。自ら若。槍棒を備へて。あ
 人を宋公明の墓の側りて葬りたり。それを西小河口の墓を築き。州の百姓



新編水滸畫傳卷之九



楚州夢見注
 靖忠廟を
 建て梁山泊の
 朝ふ摸擬す

新編水滸畫傳卷之九

色うと奏す。遂に巧をよきひらりて。侍下天子に
て。富体揚城と退り。所酒と營せ。勅使を召し。ひらりて。對を
も。奏者ある。後病死せし。と奏す。又宿右尉を召し。奏す。宋
江の忠義あるを。後りひらり。若侍の地を。本經に宋江の并宋江
のあり。討せし。宋江の職を。後りあり。と。久々。風疾。後。自
表を。官を。辭し。故郷の鄆城縣に。回す。えの。と。農業を。勸を
給ひ。天子。考を。感。と。ひ。涉。十。萬。田。地。三。千。畝。を。賜。つて。を
家を。後り。と。安。平。を。胡。廷。小。女。を。後。宋。官。を。を。ん。で。秘。書。學。士
となり。子。孫。永。く。業。を。承。り。と。す。去。り。天子。の。再。び。自。ら。勅。使。を。遣
し。宋江。を。討。て。忠。烈。義。濟。靈。應。侯。と。追。号。し。涉。百。萬。里。を。躬。つて。梁山
泊。の。廟。堂。を。建。立。し。精。忠。の。廟。と。い。ふ。御。筆。の。額。を。う。け。玉。戸。梁。門

明皇画棟その美のなごう。後。英。令。殿。上。と。宋。江。明。と。始。り。と。二十
六人の天罡星の像を。安。立。し。た。右。廟。り。宋。江。を。榮。と。す。七。十。二
人の地煞星の像を。安。立。し。て。四。時。の。祭。を。あ。り。と。す。と。や。さ。ま。で。後。り
ふ。と。宋。江。明。を。あ。り。と。す。と。や。而。を。躬。つ。て。あり。風。を。常。に。召。を
其。と。す。と。や。威。を。あ。り。と。す。と。や。と。す。と。や。州。蔡。兒。陸。と。其
後。あ。り。と。す。と。や。大。殿。を。建。立。し。て。結。構。梁。山。泊。の。方。を。と。す
年。の。四。時。の。祭。を。あ。り。と。す。と。や。万。民。頂。禮。し。今。も。の。つ。つ。と。す。と。や。改。絶。と。す。と。や
む。古。跡。今。も。存。せ。り。と。す。と。や。右。史。唐。徠。二。首。名。挽。の。詩。あり。と。す
莫。把。行。藏。怨。老。天
一。心。征。臘。摧。鋒。日
煞。曜。罡。星。今。已。矣
韓。彭。當。日。亦。堪。憐
百。戰。擒。遼。破。敵。幸
諛。臣。賊。相。尚。依。然

早知鴆毒埋黃壤

學取鳩夷泛釣船

又

主雷廟食死封侯

男子平生志已酬

鐵馬夜嘶山月暗

女猿秋嘯暮雲稠

不復出處求真跡

却喜忠良作話頭

千古蓼洼埋玉地

落花啼鳥總關愁

後人の詩ふ

由來義氣包天地

只在人心方寸間

置殺廟前秋日淨

英雄常伴月光寒

又一律あり

梁山寒日冷無輝

忠義堂深昼漏遲

孤塚有人薦蘆藻

六陵無淚濕羽衣

內苑羯鼓催花發

小殿珠簾看雪飛

義血一腔人面八

聖光煞耀仰神威

予ヲシテ燕青ノ先見ト金聖歎ガ才

有ルナラバ九十冊本ヲ断シテ七十冊ト

為サセテヲ埋メテ有ル月

意ハ此ノ如ク也

龍ノ如ク也

何ノ哀ノ有様ヲ嗚呼嘆カ嘆カ

其有本路

竹編大許畫傳卷之九

秋朝、作者ニシテ、編ヒシメバ、宋月
花采、死シ、經久ノ如ク不体裁、改テ
シメテ、慥、切腹トカ、亦ハ例外トカ、出シ
モノヲ流石ニ支那、作者ナク

新編水滸畫傳卷之九拾 終

九編之尾 一部大尾

新編水滸畫傳跋

支那有水滸傳之作。世稱奇筆。抑水滸也者。梁
山泊之謂傳也者。所聚水泊。天罡地煞。一百零
八人來歷之謂。卷中之目錄者。如蒙求標題。本
文者。似各譜。惟原出牌史家一時之戲編。初表
題冠忠義二字。吳門金聖歎斷一百回。為七十
回。且省忠義二字。此書專言寇盜放火殺人。之
事業。普演俠者。不避水火之意。氣其間。世態万

變互交恠異竒譎屢儲夢寐託宣旦往々假正
史實有之人強首尾一部故皇帝叱四賊官屢
而不果咎有似兒戲是作者不得止也諺云盛
名之下難久居易云君子見幾而作無至悔宋
汪盧俊義不曉之倘令燕青爲宋盧疾察毒餌
不食鴆酒不飲然此時金國兀求之軍事起宋
盧吳用李達之們不如斯一部難約是亦作者
所不得止也乎嚮水滸畫傳一編十卷刻成東

武叢笠翁所新譯也其旨趣卷首備言愚因書
肆之需副編八十卷稿畢間有論者之言舉之
通計九十冊而滿尾焉固不學老衰之所述謬
誤可夥四方之君子枉賜宥恕文政戊子孟冬
東武南郊伊皿子隱子高井蘭山翁述

京都書林

丸屋善兵衛

東都書林

英大助
英文藏
丁子屋平兵衛

浪華書林

心齋橋筋本町角
河内屋藤兵衛
心齋橋筋博勞町角
河内屋茂兵衛

和漢西洋書籍賣捌處

群玉堂河内屋岡田茂兵衛

大阪心齋橋博勞町角

依信州

